



図書紹介 神代健彦、藤谷秀編著 『悩めるあなたの道徳教育読本』

樫下, 達也

(Citation)

研究論叢, 26:99-101

(Issue Date)

2020-09-04

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81012441>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012441>



神代 健彦・藤谷 秀 編著

『悩めるあなたの道徳教育読本』

榎下 達也（京都教育大学）

「よりマシな道徳科をつくろう」。本の帯に目立つように書かれたこの一言が本書の立ち位置とスタンスを示している。「はしがき」によれば、本書は「道徳の教科化という看過できない学校教育改革に危機感を覚えた研究者・教師・編集者の協働」により生まれた。と同時に「現に制度として成立し、学校現場でも着々と進んでいる新しい道徳教育について、抽象的な批判のみをもって終わらせることもできない」という立場をとる（4-5頁）。つまり学校現場の外から「抽象的な批判」だけをしているのではなく現場教師と子どもたちの道徳の教科化への戸惑いに寄り添い、様々な分野の研究者が専門の立場から道徳科授業の可能性を探ろうというのが本書である。

執筆陣を見てみよう。共同編著者である神代健彦（教育史・道徳教育論）、藤谷秀（倫理学・哲学）以下、越川葉子（教育社会学）、小谷英生（倫理学・哲学）、和田悠（社会教育）、小野祥子（国語科教育）、有本真紀（歴史社会学・音楽科教育）が名を連ねる。なお小野は中学校と高等学校で教鞭を執る傍ら慶應義塾大学で非常勤講師として国語科教育法を担当している（以上は本書執筆者プロフィール欄による）。「教育学部的な」見方をすると、道徳科の「教科教育」の研究者（＝道徳教育論の専門家）と「教科専門」の研究者（＝倫理学（哲学）者）が、現場の教員や隣接する領域の専門家とともにこの教科の本質を議論した一冊といえよう。

以下、本書の構成を紹介しておく。（ ）内は執筆者である。

はしがき

第1部 道徳科を読み拓く：わたしたちの道徳教育言論

第1幕 道徳教科化そもそも物語（神代）

第2幕 いじめ問題から見る道徳教育の盲点（越川）

第2部 道徳の多元宇宙を読み解く：自分・人・社会・生命をめぐる

幕間（藤谷）

第3幕 自己犠牲の道徳論はもうやめよう：主として自分自身に関すること（小谷）

コラム① 道徳主義にご用心（小谷）

第4幕 「人」とは何か、あるいは誰か、考えてみよう：主として人との関わりに関すること（藤谷）

コラム② 狼少年に愛を（小谷）

第5幕 「一八歳選挙権」時代の道徳教育をつくろう：主として集団や社会との関わりに関すること（和田）

コラム③ 音楽教育の成り立ちと道徳（有本）

第6幕 「生命の尊さ」を料理しよう：主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること（小野）

カーテンコール：あとがきにかえて（全員）

第1部はいわば「道徳の教科化」の問題点を制度との関連で浮き彫りにする概説編となっている。第1幕が本書全体の導入部となり、第2幕とともに「道徳教育原論」として位置付けられる。「道徳教育原論」と銘打っているが、実際のところは道徳教育を通して現在の教育そのものの諸問題が学べるようになってきている。最新の学習指導要領の特徴を確認しながら、教育制度、子どもの発達、評価などに触れそれらの課題を示し考える、道徳をネタにした「教育原論」的内容となっているのである。

第1幕で語られることが興味深く、また本書全体の方向をよく示しているので紹介したい。本幕は、架空の大学教員「クジョウ先生」、クジョウゼミ出身の現場教師「ナナさん」、大学院生「ケイタクン」の3人が対話をしたり、手紙のやりとりをしたりしながら道徳の教科化の問題点を描出していく形式となっている。「ナナさん」が語る現場の混乱ぶりは、現場で教員をしていたことのある評者にも説得力を感じさせるリアリティをもっていた。

とくに面白く読んだのは、最新の学習指導要領で強調される「資質・能力」を「新自由主義に適応した子ども理解、人間理解」とであると説明し、「『自己責任』という新自由主義的道徳」に警鐘をならす箇所である。

まず、「クジョウ先生」は資質・能力、あるいは「考え、議論する道徳」というアイデアは、「特定の恣意的な価値観が押し付けられる道徳科」を回避する手がかり、あるいは「解毒剤」になる、とする(38頁)。しかしここに資質・能力の別の側面が落とし穴として潜む。曰く、「資質・能力」論は、子どもたちに対して、「この社会を生きるうえでより高い価値を持つ自分になっていくように、みずから主体的に学んで生きなさい」と言っているとする(42頁)。

これを道徳教育に引きつけるとどうなるか。例えば子どもたちから「貧困に陥るのは仕事を怠けたからだ」という意見が出たとする。「それはつまり、ある種の『自己責任』という新自由主義時代の道徳を、子どもたちが日々の生活の中で自然に学んでいるということ」である。そしてこの「子どもたちが自然に学んだ新自由主義的な道徳」を「彼らが主体的に学んだものだから、ということで、そのまま肯定するのかどうか」という問題が出てくる(43頁)。「クジョウ先生」の持論は続く。

資質・能力って、…次世代のより良さを目指す人間の意図的な営みとしての「教育」とは、少し違う…そこには次世代の幸福を何とかして保障してあげたいという「責任(レスポンシビリティ)」の感覚が欠如している…いろいろな理由で学びにつまずく子どもたちに対して、自由なのだから、その結果「倒産」することもあなたの「自己責任」ですよ、とならないでしょうか(44頁)。

では道徳的価値の押し付けを回避しつつ、子どもを「新自由主義」の犠牲者にするともなく道徳科授業を進めるにはどうすれば良いか。その応えとして本書が示すのは「保守的な押し付け道徳」と「新自由主義」の極端と極端の間の「最適航路を」安全に航海できるよう「最適をいくための大まかな地図(理論)」と「状況の中で判断する実践的思慮(教師の専門性)」の両方を手にすることである(46頁)。紙幅も限られるので詳細は措くが、「地図(理論)」として具体的に提示される一つが、「『よさ』や『正しさ』についての人間の知的探求の遺産」としての倫理学である。倫理学を知ることは「目の前の子どもの道徳の探求の質をつかむめあて」にもなり、教師は「子どもと文化遺産としての道徳(倫理)をつなぐ媒介者」となることができる。教師がすべきことは「道徳という人類の探求へと子どもをいざない」「一緒に道徳というジャングルを探検する優秀なガイド」となることなのである(62頁)。また授業の方法論として、とくに中学校では「哲学対話」を取り入れることを提案している。

第2部はこれを受けて、道徳科で扱われる様々なテーマ、「自分自身に関すること」「人との関わりに関すること」「集団や社会との関わりに関すること」「生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」にアプローチしてゆく。現場で扱われてきた教材を取り上

げながら、あるいは過去の様々な実践を取り上げながら、具体的な授業も想定して倫理学(哲学)的な思考を深めていく。いわば「最適をいくための大まかな地図(理論)」と「状況の中で判断する実践的思慮(教師の専門性)」の探求方法の具体的な例示がここで行われるのである。

第1幕に限らず本書全体を通し、各幕は対話形式により論が進められていく。「哲学対話」的な実践の方法を本書全体が体现しているのだ。道徳科に悩める現場教員はもとより、教師を目指す学生たちにも、気軽に読める「教育学入門書」としてぜひ手にとってもらいたい1冊である。

(はるか書房刊 2019年9月発行 本体価格
1,800円+税)